

## 25年度 氷見市教育総合センターだより 第6報

メールアドレス [kyouikukenkyu@city.himi.lg.jp](mailto:kyouikukenkyu@city.himi.lg.jp)

ホームページアドレス <http://www.city.himi.toyama.jp/hp/menu000000500/hpg000000416.htm>

### 「『ひみっ子の夢と希望』きらめき推進事業」 11月14日(木)

演題 「夢を跳ぶ」

講師 パラリンオリンピック走り幅跳び選手 佐藤 真海 氏

今年度の中学2年生を対象とした「『ひみっ子の夢と希望』きらめき推進事業」は、佐藤真海氏を招いて行われました。講師の佐藤氏は、早稲田大学在学中に骨肉腫を患い、右足を膝下から切断し義足の生活を余儀なくされました。その後、走り幅跳びを始め、アテネパラリンピックより3大会連続出場され、今年4月、ブラジルで行われたIPCグランプリシリーズで5m02を記録し、日本記録及びアジア記録を更新されました。大学卒業後は、サントリーホールディングズに入社され、児童生徒を対象に出張授業やワークショップなど多数実施されています。2020年東京オリンピック招致活動の最終プレゼンターとしても活躍されています。



佐藤氏は、佐藤氏の中学生・高校生時代に「文武両道」で勉強やスポーツに頑張ったことや大学生時代に病気になりその病気を乗り越えたときのこと、故郷の宮城県気仙沼市が東日本大震災に遭ったときのことなどの話をされました。佐藤氏は、「常に目標をもって頑張ってきた力が、ぐっとこらえる力、乗り越える力になっている。家族や仲間がいたから病気と戦おうと思った。また、命の大切さを考えるようになった」など生徒の心の琴線に触れる話をされました。会場の生徒達に対して、「人と比べない自分らしい思いをもって生きてほしいと願っている。自分を信じて、限界のふたを外してチャレンジして行ってほしい」とのメッセージをいただき、参加した生徒たちは、未来に向かって自分を高めるために頑張っていこうという気持ちになったようでした。

### 「佐藤真海氏の講演を聴いて」生徒の感想より

#### 「限界を越えて挑戦する」という言葉から

- ・私は少し無理だと思ったら自分の中でできない壁をつくりどんなことでもあきらめていました。今日の講演を聞いて、限界のふたを開いて限界を越えてみようと思いました。
- ・佐藤さんは、人間はどんな辛いことがあっても、乗り越える力があると言っておられました。本当にその通りだと思いました。これから生きていく中で、辛いことや悲しいこともたくさんあると思いますが、佐藤さんの言葉を思い出して頑張りたいです。

#### 「命」の大切さ

- ・私はいつも普通に生きて、いつも仲間がいるという生活が当たり前だと思っていました。でも、今を生きるということは、すごく大変でとても大切なことなのだと感じました。私は命の大切さを何も分かっていなかったと思います。だからこそ、今日から自分の命も、家族の命も、友達の命も大切にしたいと思います。

## 将来の夢・目標をもって -----

- ・私は最近、時間の使い方が下手だとか、もっと目標をもって物事に組みとめとか、よく親に叱られます。将来の夢どころか自分の進路についても考えたことがありません。佐藤さんの話を聞いて、もう少し目標をもって色々な事を頑張ってみようという気持ちになりました。
- ・今、将来の夢は何なのか聞かれても答えられませんが、どんな小さな目標でもその目標に向かって頑張りたいと思います。その一つ一つにしっかり向き合って、これからの夢を見つきたいです。
- ・私には夢があります。その夢のために努力しているのですが「難しいからあきらめなさい」と言われ、あきらめかけていました。ですが、話を聞き、自分の限界まであきらめずにやりとげること決めました。あきらめずに頑張ろうと思います。
- ・僕の夢は、東京オリンピックでハンドボールの日本代表に入ることです。だから、これからも練習に一生懸命取り組み、夢に向かって頑張りたいです。
- ・あきらめるとそこで終わりだということが分かりました。僕は、できないと思ったことは、すぐにあきらめていることが多かったけれど、佐藤さんは、足がなくなってもあきらめずに頑張ってくれました。今あきらめているピッチャーというポジションは、毎日走ったり、足腰をきたえたりしないといけないので、この練習を毎日して、すごくいいピッチャーになり、将来は、プロ野球選手になりたいと思います。

## 佐藤さんの体験談、パラリンピック選手の映像から -----

- ・佐藤さんは、中学校時代、朝早くに起きて、毎日、坂道ダッシュをしていたとおっしゃっていました。本当にすごいなと思いました。毎日、こつこつ努力するということは、いつか大きな成功につながるのですね。そのことを忘れずに生活していきたいと思います。
- ・佐藤さんは、「たくさんの量を練習するより質の高い練習の方がよいと言われました。だから私も吹奏楽部の練習を量より質の高い練習をしたいです。そして、佐藤さんのように大会で成績を残したいと思います。
- ・私は、佐藤さんに勇気もらいました。辛い試練を乗り越えていくのはとても過酷ですが、努力してそれを乗り越えたなら自信にもなると思うので、これからも精一杯佐藤さんに負けないように頑張っていきたいと思います。
- ・これからは、佐藤さんのように何事にもめげず粘り強く頑張っていきたいです。また、佐藤さんは、からをやぶることが大切と言っておられたので、その言葉を心に残して自分のからをやぶれるように努力していきたいです。
- ・私は、佐藤さんの話を聞いて、こつこつと少しでも毎日やることはとても大切だということが改めて分かりました。私は毎日勉強するのが嫌でやる気になったらやるというふうにしてありますが、佐藤さんはそんな気持ちを抑えてこつこつやったという話を聞いて、私はすごいなと思いました。これからも、目標をもちこつこつ頑張っていきたいと思います。
- ・目や足が不自由であっても、一人一人強い意志があれば何でもできるのではないかと思います。私の近い未来には受験があります。今、努力をすれば、近い未来、そして将来も変わるのではないのでしょうか。「頑張る」ということは、自分にとっても人にとっても大切なことだと改めて感じました。
- ・僕は、改めてスポーツの楽しさ、素晴らしさを感じることができました。体に障害があっても、困難を克服し、目標を持ち続け、たくさんの人に夢や希望を与えている佐藤さんを、僕は同じ日本人として誇りに思います。
- ・私は、佐藤さんを見習ってこれから頑張っていこうと思います。まずは、勉強から、日々の授業を真剣に受けて、少しずつでも成績を上げていきたいです。これから何事にも精一杯取り組みます。

## 第2回 学力向上研修会

11月20日(木)実施

市内小・中学校教務主任または研究主任を対象に、第2回学力向上研修会を実施しました。

全国学力・学習状況調査において毎年、小・中学校共に全国トップの成績を上げている「秋田県の取組について」北部中学校田辺由美子教頭先生、窪小学校谷本浩美先生の研修報告を谷本先生に代表して話していただきました。その発表内容を紹介します。

### 秋田県（湯沢市立湯沢東小学校・湯沢北中学校）の取組より（提示資料より抜粋）

#### ○ 秋田県の特長

- ・学校質問紙と児童生徒質問紙の結果を比べると、教師と児童生徒の認識のズレが全国より小さく、児童生徒に寄り添った授業が行われている。
- ・記述式の問題の正答率が、他の問題形式より全国との差が大きい傾向にある。考えたことを書かせる、説明させる、話し合わせるといった言語活動を充実させた授業が進められている。
- ・調査問題等の活用がよくされている。

#### ○ 小中連携教育

- ・小中一体型の学校で、小中連携教育を行っている。
- ・子どもも教師も保護者も地域も繋がる連携教育を目指している。
- ・中1ギャップは解消されてきている。

#### ○ ノートづくりをイメージした単元計画によるPDCAサイクル

単元づくりのシステム化が進められている。

P：単元リーダー（各学年）が、各時間の子どものノート（見開きで1時間）をイメージした単元の指導計画を作成

D：指導計画を基にした共通実践

C：単元末に、単元評価問題を実施

A：補足的な指導、指導計画の見直し

#### ○ 家庭学習の取組

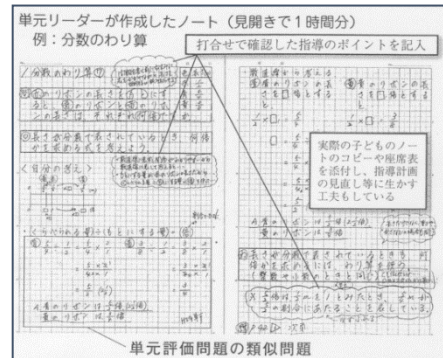
- ・特別活動で家庭学習について考え話し合っ、自分に合った方法を考える。
- ・自学のノートを毎日（復習見開き1ページ+自勉見開き1ページ）行う約束になっている。
- ・教師の朱書き（低学年は保護者の一言の書き入れや声かけの協力）が頑張る力になっている。ノート2冊交互に使用し、教師の朱書きを入れている。

#### ○ 成果の要因

- ・熱心で前向きに授業に臨む子どもたちの学習姿勢
- ・自分の考えを書いたり話したりする授業
- ・話し合いを重視した探究型の授業
- ・家庭での学習習慣と生活習慣の良さ
- ・学校・家庭・地域の連携の強さ
- ・校内研修会、小中連携、区市町村の事業など研修システムの充実
- ・学力調査結果の計画的活用
- ・大学との研修・研究に関する連携・協力



〔湯沢東小学校・湯沢北中学校〕



加えて

- ・少人数指導の推進
- ・補習の充実
- ・研修システムのレベルアップ
- ・3つの授業（わくわくする、わかる、わらいのある授業）

## 全国学力・学習状況調査結果（国語）よ

今年度の全国学力・学習状況調査結果より、下記のような課題が見えてきました。

- **小学校**；国語A<sup>3</sup> 「文のはじめの5文字を丸で囲みましょう。」や「長い1文を、主語に注目して、接続語『だから』を使って二つの文に書き直す。」の正答率が低かった。文が句点（。）によって区切られていることや、1文を2文に分けて書くことに課題がある。各学年で習得しておくべき基礎的・基本的な知識・技能の定着状況に不十分なものがある。

### 各学年の発達段階に応じた指導の積み上げが大切

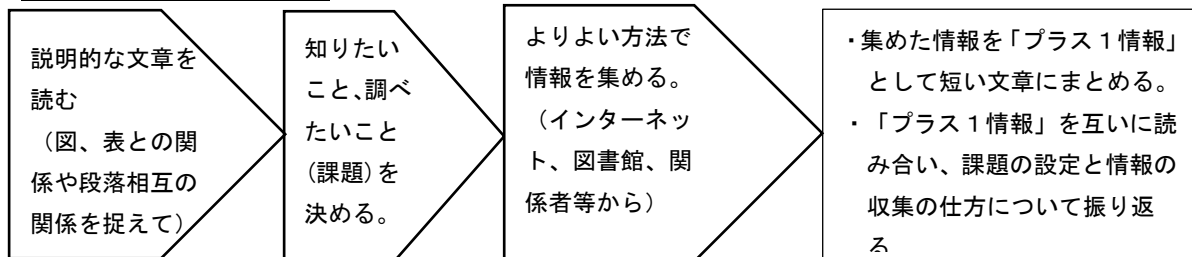
文の定義を理解し、文と文の意味のつながりを考えながら、接続語を使って内容を分けて書くことができる

**第5・6学年**・文と文との意味のつながりを考えながら分かりやすい文にする

**第3・4学年**・指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割の理解

**第1・2学年**・文が句点によって区切られること  
の理解  
・文の中における主語と述語の関係

- **中学校**；国語B<sup>1</sup> 「課題を決め、それに応じた情報の収集方法を考えることができるかどうかをみる」問題（記述式）の正答率が低かった。この問題では、自ら課題を設定した後、調べる手段を選び、情報の求め方を具体的に記述することが不十分であった。課題を解決するために情報を収集する際には、情報を収集する手段の特徴を理解し、自分の課題の解決に適した手段を選ぶ必要がある。



よりよい課題の設定の仕方や適切に情報を収集するための方法は、他教科等の学習とも関連を図って指導することが有効

(平成25年度 全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた 授業アイデア例 参照)

## 「小中学校の学びを繋ぐ教科指導系統表」〈国語、社会、算数・数学、理科〉の活用

上記の全国学力・学習状況調査結果や普段の学習指導から見て、児童生徒の学力の向上を図るには、それぞれの担当の学年での基礎・基本を定着させることが大切であり、小中9年間を見通した系統的・継続的な学習指導も大切であることは、どの先生方も実感しておられることでしょう。

そこで、今年度、小・中連携・学力向上推進委員会で、国語、社会、算数・数学、理科の4教科の系統表を作成し、先生方に配布します。教材研究や授業研究の際には、手元に置いて、どの学年でどのように学習してきているのか、今の学習はどの学年のどのような学習に繋がっているのかを意識しての指導のために活用してください。

